

Contents

パキスタン地質調査所における
JICA リモートセンシングトレーニングコース

第21回 自分で作ろう!! 化石レプリカ
“中生代の化石”

つくばスタイル賢い子育て応援フェスタへの
ブース出展
「化石をみよう! 化石の絵をかこう!」

環太平洋鉱物資源評議会(CPC)への参加報告

EGU参加報告

OneGeology Steering Group
第一回会合報告

経産省における「地質の日」記念展示

平成21年度文部科学大臣表彰
創意工夫功労者賞を受賞
—地質図類メタデータ作成とデータベース
公開の考案—

スケジュール

編集後記

パキスタン地質調査所における JICAリモートセンシングトレーニングコース

小笠原 正継 (地質情報研究部門)

パキスタン地質調査所(GSP)と産総研地質調査総合センターは、工業技術院 ITIT プロジェクト、JICA(国際協力機構)技術協力プロジェクトなどを通して、1986年以來長い協力関係がある。特に JICA の GSP 地質科学研究所設立のプロジェクトには旧地質調査所が全面的に参画していた。また 2005 年 10 月にパキスタン北部で発生したカシミール地震の後、地質調査総合センターの活断層研究センターによる共同調査・研究があった。このような密接な協力関係を背景に、2006 年に GSP 所長が地質調査総合センターを訪問し、さらなる協力の要請を行っている。GSP はリモートセンシングデータを活用した地質図作成効率化および地質科学研究所の機能強化のプロジェクトを開始しており、それらのプロジェクトに対する技術的なアドバイスが求められていた。

2008 年、JICA はパキスタン地質調査所に対するフォローアップ協力の実施を決めた。このプロジェクトは、19 年前に設置された GSP 地質科学研究所の各種分析機器等機材とその利用技術へのフォローアップを中心とするが、リモートセンシング技術への協力を含んでいる。そのため、JICA フォローアップ協力事業の一環として、2 月 23 日から 3 月 12 日までの約 3 週間のリモートセンシングのトレーニングが実施された。

GSP はリモートセンシングデータを活用した 5 万分の 1 地質図作成効率化のプロジェクトの中で、リモートセンシングデータ処理ソフト ERDAS Imagine を 7 ライセンスとパキスタン全土の 7 割をカバーする SPOT のデータを購入し、地質図作成の効率化を計画した。しかし、様々な事情からリモートセンシングデータを地質図作成に有効に活用するには至っていなかった。今回のトレーニングコースではリモートセンシングデータを 5 万分の 1 地質図作成に活用できるような基礎技術移転を目標とした。GSP における現状分析から、1) リモートセンシングデータの地図投影法の変換手法と 5 万分の 1 図画への切り出し法、2) ASTER データを使用した岩相区分をトレーニングの主要目標とし、実用的な技術取得が可能な講習を

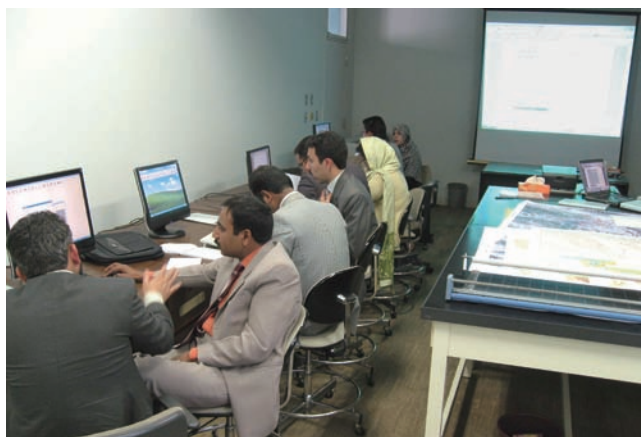


写真 GSP 地質科学研究所におけるリモートセンシングトレーニングコースの様子。

目指した。

トレーニングは地質科学研究所で行われ、GSPのカラチ、クエッタ、ペシャワール、イスラマバードの各所から合計11人が参加した(写真)。講師は小笠原と三菱マテリアルテクノ社の根岸博士が担当した。今回講習で使用するリモートセンシングデータ、パキスタンの4地域のASTERデータ21シーン、ALOSのAVNIR2データ9シーン、PRISMデータ14シーンは、JICAにより供与された。またパキスタン全土のLandsat ETM+ GeoCoverも使用した。今後、JICAフォローアップ協力ではASTERデータ約250シーンを供与する計画で、岩石の露出が良くリモートセンシングデータが活用できるパキスタン国内の地域はこのデータでほぼ

カバーできる。

今回のトレーニングで、参加者は地質図作成に必要なリモートセンシングデータ処理法をマスターでき、JICAフォローアッププロジェクトによるASTERデータの供与が完了すれば、パキスタン国内の地質図作成の効率化が図られると期待される。またトレーニングの中で、リモートセンシングの基礎とデータ処理プロセスの詳細を記述した約200ページのマニュアルを参加者と講師が共同で作成した。このマニュアルは今後各自が作業する上で活用されることと考えられる。本トレーニングコースの実施にあたってはJICAパキスタン事務所の清水次長と小柳氏から多くのご支援をいただいた。

第21回 自分で作ろう!! 化石レプリカ “中生代の化石”

澤田 結基・利光 誠一・吉田 朋弘(地質標本館), 兼子 尚知・中澤 努(地質情報研究部門)

地質標本館では、ビニルシリコンでできた化石の型に石膏を流してレプリカを作るイベント「自分で作ろう!! 化石レプリカ」を毎年3月に実施しています。その第21回目が、南から桜の便りが届き始めた2009年3月21日(土)に開催されました。

当日は55名の参加があり、合計82個のレプリカを作製していただきました。今回用いた型のもとになった化石は、ジュラ紀アンモナイト(*Hidoceras sublevisoni* (Fucini):GSJF16141)と白亜紀二枚貝のトリゴニア(*Scabrotrigonia* sp.:GSJF15279)です。

今回のレプリカ作りは、千葉大学の博物館実習生6名が指導を担当しました。そこで、まず実習生に手順を覚えてもらうために、前日に手順の確認と準備を行い、当日を迎えました。

化石レプリカを作成する手順は、次の通りです。

- (1)標本館ロビーにある受付で、アンモナイトかトリゴニアのどちらを作成するかを選び、受付番号の入ったカードを受け取ります。
- (2)カードを持って、標本館1階の多目的展示室に移動して着席、指導員から作り方のレクチャーを受けます。
- (3)石膏と水を混ぜ、ヨーグルト状のやわらかさになるまでよく練りこみます。
- (4)化石の型の半分開らまで石膏を入れ、机の上で小刻みに型ごと震動させ気泡を追い出します。
- (5)石膏の残り半分を流し入れ、再度型を震動させて気泡を抜きます。
- (6)あとは館内を見学しながら約30分待てば石膏が固ま

り、レプリカが完成します。完成したレプリカを型からはずす作業はスタッフが行い、受付で番号カードと引き替えに受け取って終了です。



写真1 会場の様子。



写真2 うまく混ぜられるかな？

参加者の多くは子どもたちでしたが、大人の方の参加もありました。様々なゲストへ対応するのは、博物館実習2日目の実習生にとってよい経験になったようです。開始前にはうまくいか不安もあり緊張感も感じていたようですが、ボランティアで参加してくれた先輩実習生のアドバイスもあり、イベントが終わる頃には自信を持って対応できていたようです。

例年化石レプリカの体験学習イベントでは優に100名を超える参加者がありますが、今回はやや少なめでした。イベントの詳細を決めるのが遅くなったため、例年掲載している地域情報紙へ案内を掲載できなかったことが影響し

たようで、積極的な広報活動が必要であるとの反省を残しました。

しかし、参加してくれた子どもたちはとても熱心で、一人でアンモナイトとトリゴニア両方を作っていく子どももいました。聞いてみると、参加した子どもたちの多くは、地質標本館に来た経験があるようです。またアンケートの結果によると、イベントを知ったきっかけとして最も多かった回答は地質標本館のホームページでした。地質標本館が多くのリピーター、特に子どもたちに支えられていることを改めて実感したイベントになりました。

つくばスタイル賢い子育て応援フェスタへのブース出展 「化石をみよう！化石の絵をかこう！」

兼子 紗知・利光 誠一（地質標本館），兼子 尚知（地質情報研究部門）

2009年3月28日（土）、「つくばスタイル賢い子育て応援フェスタ」がイーアスつくばで開催されました。これは、つくばスタイル協議会（<http://www.tsukuba-style.jp/>）主催で、つくばが有するソフト・ハード面の良好な教育環境を対外的に発信し、つくばスタイルの「知」を教育の観点から印象付けることを目的としたイベントです。

イベント会場は「アタマ」・「カラダ」・「ココロ」の3つのテーマで、つくばの子育て紹介、体験コーナーが設置され、地質標本館では地質情報研究部門と連携して、「ココロ」の体験コーナーに「化石をみよう！化石の絵をかこう！」というブースを、9:00～12:00の間出展しました（写真）。

今回の対象者は、今までにない0歳～小学校低学年という、かなり小さい子どもたちだったため、どの程度理解してもらえるかがわからず、出展内容も悩みました。そこで、事前に、同じくらいのお子さんがいる契約職員さんにご自宅で「化石のお絵かき」や「塗り絵」の教材を試していただきました。そしてその感想やコメントを参考にして教材を修正し、「触れられる化石」のコーナーとともに出展することにしました。

触れられる化石の展示としては、三葉虫、恐竜の糞、アンモナイト、魚、タカハシホタテ、ナウマンゾウ臼歯模型の6点を用意し、実際に来場された方に触ってもらいました。

小さい子どもたちは、初め、恐る恐る触っていましたが、実際に触れてみて、化石の重さや、硬さに驚いていたようです。なかでもナウマンゾウ臼歯模型と恐竜の糞に興味を持つ子どもが多かったようです。

また、ケースに入れて恐竜（ティラノサウルス）頭骨化石の1/6スケール模型も用意しました。こちらは大人の方が、足を止めて見たり、説明を聞いていました。

塗り絵コーナーでは、恐竜やアンモナイトの絵に色を塗ってもらいました。特に、恐竜の塗り絵は、たくさん色を使ってカラフルに仕上げる子どもが多く、楽しんでいただけたようです。

地質標本館の出展時間帯が土曜日の午前中ということもあり、会場全体に人が少なく、来場者は親子15組ほどでしたが、本物の化石を見たり、触ったりすることで、少しでも興味をもったり、何か印象に残ったのであればうれしく思います。

なお、このイベント出展の教材には地質の日のロゴを刷り込み、少し早かったのですが、5月10日の地質の日の案内に役立つようにしました。



写真 会場の様子。

環太平洋鉱物資源評議会（CPC）への参加報告

脇田 浩二（地質調査情報センター）

表記会合が4月24～26日に実施された。本会議に先立ち、CPCにおいて大きな功績があり、昨年4月に亡くなられたGeorge Gryc氏（USGS名誉職員）を偲んで、Advanced in Circum-Pacific Marine Resources and Hazards, The George Gryc追悼シンポジウムが実施されました（写真1）。

シンポジウムは、CPCの議長のN. Schneidermann氏がオープニングスピーチを行い、その後自然災害、資源アセスメント、マッピングのテーマで、講演が終日行われた。

自然災害のセッションでは、USGSのJ.B. Lowenstern氏が環太平洋の火山災害について、S. Kirby氏が環太平洋の地震災害についてそれぞれ報告を行った。資源アセスメントのセッションでは、N. Schneidermann氏が環太平洋の石油資源について、W. Nockleberg氏が北西太平洋の鉱物資源とテクトニクスについて講演をした。マッピングのセッションでは、R. Terman氏の環太平洋マッププロジェクトのレビューに続いて、私が「21世紀の地質図マッピング」について講演を行った。最近の数値化やデータキャプチャリングの話は、好意を持って受け入れられた。参加者はUSGSの職員、OBそして、石油会社関連のOBそしてその家族などで、参加者の多くがGeorge Gryc氏の功績と人柄をたたえていた。最後にGeorge Gryc氏の娘さんが挨拶を行い、多くの拍手を浴びていた。

シンポジウムの翌日から、CPC評議員（写真2）による会議が行われた。まず開会挨拶に続いて、昨年度の議事録の承認を行った。そして、各評議員からの報告があり、その後予算審議、プロジェクトの紹介、役員や評議員の交代についての議論などがなされた。各評議員の報告では、G. Greene氏がSOPACを中心としたオセアニアの報告、G.L. Hiriati氏がメキシコの実地プロジェクトの報告、O. Chudaev氏がロシアの経済とインフラについての報告、E. Saade氏がコロンビア沖の石油資源の報告、J.V. Barrie氏が石油・ガス・ガスハイドレートのカナダにおける活動報告をそれぞれ行った。私は日本のGSの新ユニットやCCOP-GEOGridとASEAN+3、インドネシア及びタイの5万分の1地質図マッピング計画について報告した。またCCOPの前事務局長Chen氏の代わりに、CCOPの現状について報告を行った。

現在進行しているプロジェクトは、GEOHABなどがある。GEOHABは、地質地形と漁礁の関係を研究するプロジェクトで、地質学と生物学の境界領域で、漁業にも資する活動として推進されている。GEOHABは来年ニュージー

ランドで計画されており、次回のCPC評議員会議も同時期にニュージーランドで開催される。再来年は日本、その次はカナダで開催を期待する旨が述べられた。

最後にN. Schneidermann氏が定年退職を機に、議長職を辞し、後任にD. Howell氏が就任し、D. Howell氏の代表のポジションにG. Greene氏が就任した。故George Gryc氏が担当していた財務も、G. Greene氏が兼務することになった。日本は、脇田が評議員として承認され、嶋崎氏（日鉱探開株式会社・地質調査情報センター参与）も評議員として留まることが確認された。また翌日は地質巡検も企画され、サンアンドレアス断層やMioceneの地層などの見学を行った。

CPC評議員会議は、環太平洋地区の地質・資源・環境に関する情報交流の場としての役割がある。CCOPやSOPACなどアジア・オセアニアに限定したものではなく、環太平洋の先進国と途上国が一同に会することに意義があるが、今回は北米の参加者が多数を占めたのは残念であった。日本での開催を実施するのか、また実施する場合どのように行うか、今後の検討課題である。



写真1 George Gryc氏追悼シンポジウムの様子（マイクを持って立っているのが、D. Howell氏）。



写真2 CPC評議員会議参加者の集合写真。

EGU 参加報告

木村 希生・田中 明子 (地質情報研究部門)

2009年4月19～24日、ウィーン（オーストリア）にて European Geosciences Union (EGU) General Assembly 2009 が開催された。この大会は、American Geophysical Union (AGU) に向こうを張って毎年ヨーロッパで開かれているもので、かつてはニースやストラスブールなどで開かれたこともあるが、ここ数年はウィーン郊外の国際都市に新設された近代的なコンヴェンションセンター Austria International Centre（オーストリア国際センター）が会場となっている(写真)。この会場は地下鉄駅に隣接しており、シュテファン寺院や国立オペラ座などのあるウィーン旧市街から15分程で行くことができる。

今回の学会には9,088名の科学者が参加し、口頭・ポスターあわせて12,977件の科学成果が発表された（およそAGUの半分、地球惑星連合大会の倍程度の規模とのことである）。当然ヨーロッパからの参加者が圧倒的に多いが、アジアや南北アメリカからも相当数の参加があったようである。日本からも200人前後が参加したと聞いた。プログラムおよび講演要旨集は、ハードコピーは作らず、大会が始まる少し前からオンラインで検索できるようになっていた。参加者にはこれら（容量はおおよそ1.7GB）を納めたUSBメモリーが登録デスクで提供され、宿舎での予習に役立った。また会場内ではいたるところにパソコンデスクが設置され、各セッション日程・参加者・講演要旨の検索だけでなく、その場で印刷ができ、とても重宝した。

メダル受賞者による講演 (Medal lectures) はその年の流行の研究トピックを手軽に知ることが出来るバロメーターになると思うが、今年は（気候変動の話題数は別格として）ここ数年の受賞講演内容と比較しても Hydrology に関する講演が多かったようだ。分野横断型セッションにおいても、今年度は Hydrology, Climatology に関するセッションは全体の4割程度を占めていた。大会全体としては、環境関連の発表が圧倒的に多く、固体地球よりも気圏・水圏を対象にした物理化学が、さらには Geoscience のカテゴリーを超えた環境科学が大会の主体であるかのような印象である。昨年もこの大会に参加した人の話ではこの特徴は昨年も同じで、AGU とは力点の置き方に大きな違いがあるとのこと。環境問題を利用してアメリカに経済的な揺さぶりをかけているヨーロッパの世界戦略がここにも現われている。

筆者は今回初めての EGU 参加であり、自身の専門に

関連するセッションのフォローと自分の発表で手一杯であった所がある。よって以下は、主に Geodynamics, Tectonics, Structural Geology 分野の研究発表を拝見して個人的に感じたことを記すがご容赦願いたい。発表全体を通して最も印象に残っている事は、(1) 口頭発表は研究対象・手法ともにバリエーションに富んでいた一方で、ポスター発表は ICDP など大規模プロジェクト関連の成果発表が目立っていた（筆者がよく目にしたのはアナトリア断層（トルコ）の研究成果であった）こと、また、(2) どのセッション会場にも常にある程度数の聴衆がおり各研究者の興味の多様性が窺えたことである。一方一昨年度に参加した AGU は、(1) ポスター発表の内容はバリエーションに富んでいるが、口頭発表に関しては似たような研究動機・研究対象の発表が続く傾向がセッションによってはあったし、また (2) 聴衆数がセッション会場毎で非常に大きく異なっていた。このように、EGU は AGU の印象とは正反対で、お国柄による研究スタンスの違いが表れているようで面白いと感じた。

今回の EGU 参加を通じて、EGU、AGU 両学会は学会コンセプトが明瞭に異なっていることを実感した。日本人研究者の多くは AGU に参加する傾向にあるが（開催時期の都合もあると思う）、個人的には教科書の常識や一般認識を再検討するような基礎研究、アプローチを変えることで見えてきた新アイディアの話、すべての研究の基盤となる地域地質（ただしヨーロッパ色が強い）などさまざまな話題が口頭発表で楽しめる EGU の方が好印象であった。



写真 会場風景。

OneGeology Steering Group 第一回会合報告

加藤 碩一（地質調査総合センター代表）

国際的な小縮尺地質図デジタル情報の共有を図るために成功裏に進められてきた OneGeology（以下 1G）の今後をどう発展させるかについて協議する第 1 回運営委員会（以下 SG）が、4 月 23・24 日にパリで開催されました。以下の表のように各大陸地域を代表する地質調査所相当の組織代表を中心とし、事務局及びオブザーバーとして国際機関の担当者が出席しました（写真）。

互選によって SG 初代議長として Dr. Malahoff 氏、副議長として Dr. Schneider さんを選出しました。任期は 4 年です。主な議事は次の通りです。

まず、1G の経過と現状の報告です。1G のコンセプトはもともと CGMW の発想でしたが、BGS や BRGM が予算化を含めて大きく主導してきました。2006 年 2 月に BGS で具体的なコンセプトが策定され、2007 年 3 月にイギリ

スのブライトンで関心を持つ 43 国等の参加者を集めて合意形成を図り "Brighton Accord" を決めました。また、昨年のオスロで開催された世界地質調査所会議 (ICOGS) でも是認されました。その後 2 年間にわたり各国の GS 等の協力の下に、日常業務的な運営は BGS が、情報技術的な支援は BRGM が中核になって実施してきました。ちなみに両者合計 7-8000 万円相当を 2010 年 3 月までに拠出予定。その結果、現時点で 102 カ国の参加を得るまでに成長しました（図）。

アフリカ大陸地域（40% の国が参加）では地質情報の提供国がまだ少ない（10% 程度）ですが、それ以外は概ね順調な進捗を示しています。アジア地域も GSJ の積極的な関与と CCOP との連携によって大いに進捗しましたが、1G として幾つかの課題が残っています。

どういうわけか中近東もアジアに属するとされていますが、1G も有効なパイプを持っていません。しかし CGMW は従来から小縮尺マップ編纂で強いつながりを持っており、てこ入れをすることになりました。中国は、BGS の働きかけで今秋にはデータ提供が行われる運びとなりました。インドも 1G が苦手とする国ですが、試みに災害図編纂等をてこに GSJ が働きかける (CCOP の外なので) ことなどが期待されました。ロシアも難題ですが、やはり CGMW などと連携して一層のデータ提供の働きかけをすることとしました。

来年 4 月以降の 1G の運営をどうするかが最大の課題です。SG は設立されましたが、運営母体をどのようにするか (1) 現状どおりボランティア・ベースの有志の集まり、(2) 明確な規則を設定して SG を中核に強化、(3) 法定の組織設立の選択肢が議論されました。当然のことですが、いずれにしても財源問題が深く関わり、これを含めて今回結論は出ませんでした。概ね (2) を具体化する方向で

Africa:	Dr.Gabi Schneider, ナミビア地質調査所 Director
Asia:	Dr. Hirokazu Kato, 産総研地質調査総合センター代表 (GSJ,AIST) (Dr.Hee-Young Chun CCOP事務局長の代理)
Europe:	Dr.Marco Komac, スロベニア地質調査所 Director
Latin America:	欠席
Northern America:	Dr.Suzette Kimball, 米国地質調査所 (USGS) Acting Director
Oceania:	Dr.Alex Malahoff, ニュージーランド GNS Science, Chief Executive
Executive Secretary:	Ian Jackson, 英国地質調査所(BGS)副所長
Technical Co-ordinator:	Dr.Francois Robida, 仏国地質調査所(BRGM)
Secretary:	Ms.Katy Booth, 英国地質調査所
Observers:	Dr.Robert Missotten and/or Sarah Gaines, ユネスコ, Dr.manuel Pubellier, 世界地質図委員会(CGMW)

表



写真 会議参加者。

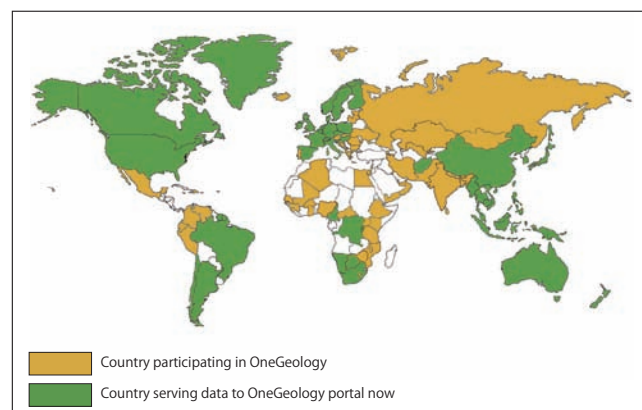


図 OneGeology 参加国 (2009 年 5 月現在)

す。私の印象ではBGSは(3)をまだあきらめていないようです。ユネスコからは、1GとCGMWとの連携のもとに新たにInternational Coordinating Committee for Global Geoscience Mapping(ICCGGM)設立が提案されましたが、時期尚早の感があり現時点では見送られました。私の印象では、BGSやUSGSはあまりいい顔をしていませんでしたが、ユネスコは関連する国際機関にかなり根回しをしており、かつながしかのユネスコからの予算を想定している

ようで、いずれ再浮上してくると思います。このほか世界銀行や民間(例えば情報産業)からの資金導入なども検討されましたが、同時にその危険性(とくに後者)も指摘されました。

その他、次のIGC(2012)までの実行目標リスト設定(たとえば参加国数140)、知的財産権問題、情報技術課題や他の国際機関との連携など多くの議論がなされました。次回のSGは、来年4月にニュージーランドで開催予定です。

経産省における「地質の日」記念展示

森田 澄人(地圏資源環境研究部門)

「5月10日は地質の日」。地質の日は、明治時代の初期、アメリカ人のB・S・ライマンらが調査して作成した日本最初の広域地質図幅、「日本蝦夷地質要略之図」が刊行された日(1876年5月10日)を記念して2007年に定められました。初めて施行された昨年からは、5月10日やゴールデンウィークなどには地質に因んだ様々なイベントが全国で開催されるようになりました。地質調査総合センター(GSJ)では昨年に引きつぎ経済産業省での「地質の日」特別展示を企画し、4月20日から5月11日の期間、同省本館1階ロビーの展示を通してGSJの活動と地質の日の紹介を行いました。

初回だった昨年から一般的な地質と地質図の紹介であったのに対し、今年の主なテーマは鉱物資源を取り上げました。展示スペースの導入部には日本列島周辺を構成する島弧と縁海の分布とその詳細な地形が眺められるよう、大型の三次元カラー地形図を掲げ、また全体の背景として、各地方の鉱物資源図をつないで作成した全国の鉱物資源図を、ほぼ原寸大のまま幅5mにして掲示しました。さらに、GSJが携わる世界の資源フィールドや海底熱水鉱床の写真パネル、またそれらの鉱石標本などを展示しました。

鉱物資源図は各地で産する鉱物の情報が全国地質図の上にプロットされているため、資源情報とともに地域の地質や構造の特徴が同時に学べます。

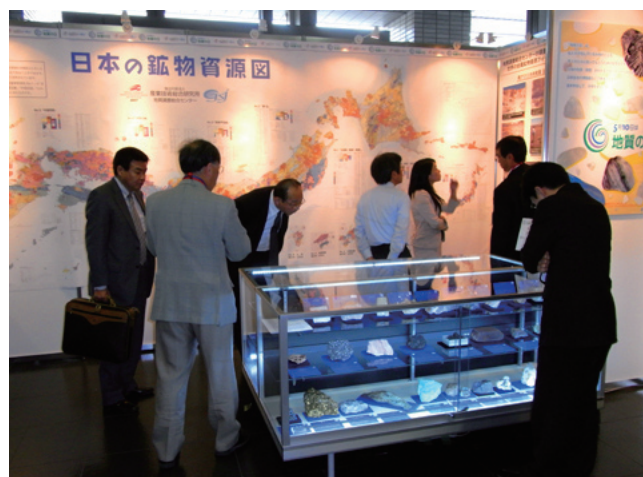
世界の資源フィールドについては、採掘現場の広い風景から露頭の写真まで、現場の様子をできる限り理解していただけるよう様々なスケールの写真を並べてみました。特に近年はレアメタルの国際的な競争競争が激しくなっています。我が国はレアメタルのほとんどを輸入に頼っていますから、アフリカや南米などで実施する地質調査の重要性について、展示を通して知っていただければと期待しています。

海底熱水鉱床で最も目を引いたのは深海調査船で撮った熱水チムニーの合成写真パネルでした。海底熱水鉱床は伊

豆小笠原弧や沖縄トラフに分布しているため、三次元カラー地形図を見ながら若い島弧や背弧リフトとの関係を確認し、また鉱物資源図を使って昔の海底熱水鉱床(黒鉱鉱床)の分布と見比べていただけました。金属の含有量を示した図では、同じような海底熱水鉱床でも、海域によって確認されている鉱物の種類や割合にかなり変化があることが分かります。

潜水調査船で採取した熱水チムニーの標本は、表面全体が底棲生物の残した膠着物質で覆われているためとても脆く繊細なため、当初どのように展示するかを検討しました。しかし、青木前地質標本館長の「チムニーは立っているものだ。」との一声でショーケースの隅に立たせることにしました。結果として生き生きとしたチムニーの様子を観察してもらうことができました。

その他の鉱石標本もガラスショーケースに納められ、ベースメタルからレアメタルに至るまで含有する金属の元素番号順に並べられました。ショーケースには、より良い照明効果とエコに配慮してLEDライトを施しました。青白く幻想的な空間をつくるショーケース内でカラフルな鉱物標本は来訪者を魅了し、省内職員や来訪者の足を止めて



写真「地質の日」特別展示の様子。

いました。幸いにして、この度の「地質の日」特別展示はたいへん好評との連絡を経産省からいただきました。

当企画では、展示資料の作成や標本の提供、また展示作業などにおいて主に地圏資源環境研究部門の渡辺 寧、

地質情報研究部門の森下祐一、飯笹幸吉、岸本清行、地質標本館の青木正博、吉田朋弘、地質調査情報センターの川畑 晶、中島和敏、中島 礼の各氏らにご協力をいただきました。この場を借りてお礼を申し上げます。

平成21年度文部科学大臣表彰 創意工夫功労者賞を受賞 —地質図類メタデータ作成とデータベース公開の考案—

地質調査情報センター

地質調査情報センター地質情報管理室の渡辺和明氏は、「地質図類メタデータ作成とデータベース公開の考案」の業績により、標記創意工夫功労者賞を受賞しました。これで当センターでは4年連続で同賞を受賞しています（GSJ ニュースレター No.20,32,44 参照）。

電子政府実現の一環として、政府の地理情報システム（GIS）関係省庁連絡会議の方針に、政府関連機関の保有する基盤的な地理情報に関するメタデータを整備し、データベースとして公開することが求められています。メタデータとは、そのデータ自体の内容が分かるように、タイトル、発行元、発行年月日、緯度・経度などの位置、形態、入手先などの情報を記述したデータのことです。標準的な形式で整備することにより、インターネット上で検索・閲覧が可能となり、データの仕様や入手方法などユーザーにとって必要な情報が得られるとい

う利点があります。

渡辺氏は産総研発足以来、旧地質調査所及び地質調査総合センターが長年に亘り出版してきた地質図類について、国内の最初の地理情報メタデータ標準 JMP1.1a 版フォーマットによるメタデータ作成を経て、現在はメタデータの国際規格 ISO 19115 に準拠した国内標準形式 JMP2.0 版に基づきメタデータを整備しています。これに経済産業省のメタデータを加え、地質調査総合センター内のノードサーバーにデータ登録を順次行い、「地理情報クリアリングハウス」サイトで公開しています。

また、渡辺氏は産総研 RIO-DB「地質情報総合メタデータ（日本版・CCOP 版）」上でそれらのメタデ

ータを整備・公開しています。CCOP 版は、地質図類メタデータのサムネール画像も一部公開していて、そのフォーマットを作成・更新する国際会議に3回出席、内容の充実に貢献しています。

以上のように渡辺氏は、出版物などの貴重な成果を死蔵させるのではなく、標準形式のメタデータとして幅広く公開することにより、成果の普及・活用に寄与していることが今回の受賞につながりました。



写真 創意工夫功労者賞を受賞した渡辺和明氏。

スケジュール

4月14日～7月6日	地質標本館春の特別展 「五百澤智也 山のスケッチとフィールドノート」（地質標本館） http://www.gsj.jp/Muse/eve_care/2009/filednote/fieldnote.html
6月3日	地質地盤情報協議会 平成21年度第1回総会及び第7回意見交換会 （富士ソフト アキバプラザ 6階）
6月6日	日本地方地質誌「関東地方」刊行記念シンポジウム 「関東地方の地質：研究の進展と今後の課題」（国立科学博物館 新宿分館） http://kanto.geosociety.jp/koen/2009-06yokoku2.html
6月15日	GSJ第14回シンポジウム「地質リスクとリスクマネジメント（その2）—海外の事例と国内での新たな取り組み—」（東京大学 小柴ホール） http://www.gsj.jp/Event/090615sympo/index.html
7月2日	GSJ第15回シンポジウム「古地震と現在の地殻活動から地震を予測する—産総研 活断層・地震研究センターが目指す地震研究—」（秋葉原ダイビル コンベンションホール）
7月25日	産総研一般公開（産総研つくばセンター）



編集後記

中野 司（地質調査情報センター）

5月16～21日に開催された日本地球惑星科学連合2009年大会には高校生を含む一般の方が多数参加されていました。そのためか、この大会に出展していたGSJのブースでは地質図などの正規の出版物よりも地質関連のポスターや玩具の「売れ行き」が非常に良かったようです。これらが無料配布物だったことがその最大の要因だと思いますが、それ以上に一般の方にも分かりやすいGSJの研究内容の表現の重要性について大いに考えさせられました。今号の記事の地質標本館や「地質の日」のイベントがそれにあたります。GSJからの情報発信ではこれまで通りの「専門家向け」はもちろんのこと、地質学を身近に感じてもらえる「一般向け」のものにも今以上に力を入れる必要があると思いました。

新型インフルエンザが猛威をふるっています。皆様もおからだにご注意ください。

GSJ Newsletter No.56 2009/5

発行日：2009年6月1日

発行：独立行政法人産業技術総合研究所地質調査総合センター

編集：独立行政法人産業技術総合研究所地質調査情報センター

脇田 浩二（編集長）

中野 司（編集担当）

志摩 あかね（デザイン・レイアウト）

〒305-8567 茨城県つくば市東1-1-1 中央第7 / TEL:029-861-3687 / FAX:029-861-3672

GSJ ニュースレターは、バックナンバーも含めて、地質調査総合センターホームページでご覧になれます。

地質調査総合センターホームページ：<http://www.gsj.jp/>
GSJ Newsletter のページ：<http://www.gsj.jp/gsjnl/index.html>